



「なごや歴まちびとの会」

日時

平成 26 年 1 月 18 日 (土) 10 : 00 ~ 11 : 15

場所

岡崎市西大友町字天神 10 番地

参加者 13 名

大友神社修復工事 見学会報告書



大友天神社は祭神を弘文天皇(天智天皇の第一皇子、大友皇子)とし、由緒書によると、大友皇子は壬申の乱の敗北後この地に流偶し草庵を結んだとの言い伝えがあり、後にその地に一祠を創建奉崇してこれを天神宮と称し、その所在地を大友としたのが起源とある。



境内は本殿、渡殿(水屋が併設)、拝殿、および社務所で構成され、本殿：切妻造り本瓦葺き平入り(規模は 3m×3m)、渡殿：切妻造本瓦葺き妻入り(間口 3m×奥行 5m)、拝殿：入母屋造本瓦葺き(6.2m×6.2m の外に 1.3m の縁)の順に連なっており、渡殿は基礎及び架構の状態から後年の増築である事が推測できる。建築年について拝殿の懸魚の裏には「明治 9 年 三河碧海郡 西大友村住人 大工棟梁 園田一 原田一」(一部分は判読できず)とある。



特筆すべき特徴としては、内部の折上げ格天井が、肘木によって持ち出された斗の上に組まれており、格天井が梁にとりついていない造りとなっている。他の事例を見ると、格天井は梁にとりつき外力が加わった際に変形する事で、揺れを吸収する役割を担う役割があると思われるが、そのような方式とは異なった意図をもっているよう思われる。かといって、肘木を天秤の様にして母屋を支えているかという、そういう方式でもなく、今後の調査研究によって明らかになる事を期待する。



また、拝殿の縁床は二手先の持ち出しとなっており、現在は肘木の先に束をたてて、垂れを防止している。床下を覗くと一手目の反作用点が自由端となっており不自然に感じる。柱にほぞ穴も見える事から、元々肘木の間に木材があったが、経年によって痩せ、抜け落ちた可能性が有ると考えられる。

今回の修復工事では拝殿、渡殿の屋根の修復、および拝殿の壁量補強、後につけられた鉄骨補強材の撤去を行っているとのことであった。

耐震改修に使用した(有)新技研の「セーフティーウォール」は鋼板 0.6mm 及び 0.4mm の内部に粘弾性体 2.5mm をはさみこむことで、鋼板の変形力を吸収し、大きな塑性率を確保するという物で、振動初期は耐力壁として、その後はダンパーとして機能する物となっており、元来の日本建築の土壁、小舞での吸収方式との共通点がある。

見学時は外壁の杉板張り、基礎部の桧連格子ともに工程が終了し、屋根は瓦葺き前の防水シートの状態であった。そのため、耐震改修に使用した「セーフティーウォール」については床下で一部が確認できるのみであった。

(文責 なごや歴まちびと 村上雅郁)

